

岩田孝『法称とその注釈者達における帰謬法と帰謬還元法』 和訳（二）

藤本 庸裕（訳）・三代 舞（訳）

凡例

- 一 本稿は、Iwata, Takashi. 1993. *Prasaṅga und Prasaṅgaviparyaya bei Dharmakīrti und seinen Kommentatoren*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 31. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien の第一部第二章総節から第一部第二章第二節まで（原著 pp. 36-62）の和訳である。
- 二 前稿（「岩田孝『法称とその注釈者達における帰謬法と帰謬還元法』和訳（一）」『久遠——研究論文集』7, pp. 1-30, 2017 年）と同様に、原著の PVin III とその注釈のチベット語の訳出箇所、またその他のサンスクリット語の訳出箇所に、著者による和訳研究等とサンスクリット語原典の対応箇所を文末に訳者注として適宜記しておいた。また、PVBh の写本も参照した。それらの略号は以下の通りである。

PVBh(Ms) Pramāṇavārttikabhāṣya (Prajñākaragupta): *Sanskrit manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam, facsimile edition*. Ed. Shigeaki Watanabe. The Sanskrit commentaries on the Pramāṇavārttikam from the Rāhula Sāṅkrtyāyana's collection of negatives, 1. Patna - Narita: Bihar Research Society and Naritasan Institute for Buddhist Studies, 1998.

PVin III(Skt) Pramāṇaviniścayaḥ, chapter III (parārthānumānam): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Chapter 3*. Ed. Pascale Hugon and Toru Tomabechi. Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region, no. 8. Beijing - Vienna: China Tibetology Research Center and Austrian Academy of Sciences, 2011.

Iwata, Takashi（岩田孝）

- [1994a] 『『知識論決択』（Pramāṇaviniścaya）第三章（他者の為の推論章）和訳研究 ad v.2 ——他者の為の推論の定義の svadṛṣṭa について（2）——』『東洋の思想と宗教』11: (1)-(25).
- [1994b] 「初期仏教論理学の研究動向管見」『仏教学』36: (19)-(54).
- [1996a] 『『知識論決択』（Pramāṇaviniścaya）第三章（他者の為の推論章）和訳研究

ad v.2 ——他者の為の推論の定義の svadṛṣṭa について（3）——帰謬（Prasaṅga）論証の妥当性——」『東洋の思想と宗教』13: (1)-(23).

[1996b] 「Pramāṇaviniścaya の註釈における帰謬還元法（prasaṅgaviparyaya）の解釈——Bu ston による解釈を中心に——」『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』春秋社、393-417.

三 他の凡例については前稿の凡例に準じる。

II 法称の後継者達における帰謬法と帰謬還元法の論式に関する解釈

本章では、法称が挙げた帰謬法と帰謬還元法の論式の具体例を取り上げ、それがどのように解釈され得るのかを、法称の後継者達が唱えた種々の解釈を基に考察する。この考察を通して、帰謬法と帰謬還元法の構成と、この二つの論証法の解釈に際して後継者達が提起した問題、そして彼らが示したその解決策を細部にわたって明らかにする。

法称は PVin III において、或る対論者の見解を論駁する実例を用いて帰謬法の論式を説明する。問題となるのは、ヴァイシェーシカ学派、ニヤーヤ学派、或いはミーマーンサー学派の見解に対する論駁である。彼らの見解によると、例えば普遍（sāmānya）のような単一の实体は、単一であるにも拘らず、それぞれ異なった時間、異なった場所、異なった状態にて生起する多くの個物と同時に結合し、故にこうした諸の個物に存在しているという²⁷。この対論者の見解は、対論者側の諸原則の背後に隠れている矛盾を指摘することにより、法称によって論駁される。その論駁の実例は次の通りである。

【主張】多く〔の個物（a, b, c, d, ...）〕に存在する（anekavṛtti）〔とされる〕単一〔の实体、例えばヴァイシェーシカ学派等によって主張されている、単一で部分を持たない普遍²⁸〕は、他の（即ち、或る特定の個物（a）とは別の）、〔それぞれ異なった時間、〕異なった場所、〔異なった状態〕にて存在する〔諸の個物〕（b, c, d, ...）とは結合し得ない²⁹（*anekavṛtter ekasya na deśādiviśeṣavatānyena yogah）。

【論証因】何故なら、〔この単一の实体は、〕場所、時間、状態に関して確定している

²⁷ See Bu 338, 7: dpyod pa pa dang bye brag pa spyi gcig yul dus gnas skabs tha dad kyi gsal ba thams cad la tha dad du gcig car 'brel par 'dod pa ... [ミーマーンサー学派とヴァイシェーシカ学派は、単一の普遍は、異なった場所、〔異なった〕時間、〔異なった〕状態にて〔存在する〕全ての個物と別々に同時に結び付いていると認める……]。

²⁸ See PVBhT(Ya) Tse 19b6 (ad PVBh p. 476, 1f.): **du ma la yod par** khas blangs pa'i cha med pa'i (*anāmśa) **gcig pu** ...; Dh 7b3: spyi la sogs pa **du ma la yod par** 'dod pa na /; Jñ 274b7; PDhS p. 741, 3-p. 742, 2: sāmānyam (dvividhaṃ param aparaṃ ca. svaviśayasarvagatam) abhinnātmakam anekavṛtti ...

²⁹ ダルモータラ (Dh 7b8: **yul la sogs pa nges pa dang 'brel pa gcig las gzhan pa'i rdzas de dang ldan pa** (P; pa ni D) **ma yin te** /) に従えば、当該の箇所は次のように訳される。「単一〔の实体〕は……〔異なった時間、〕異なった場所、〔異なった状態〕にて存在する〔或る特定の個物（a）とは〕別の諸の個物（b, c, ...）とは結合し得ない」と。もしかしたらチベット人の翻訳者（或いはダルモータラ）は、原文を *ekasya na deśādiviśeṣavato 'nyena yogah* と読んだのかもしれない^①。ジュニャーナシュリーパドラの注釈のチベット語訳は整理されていない。「所有」を表す接尾辞-vat が「如し」（bzhin du）と、yoga が「正しい／あり得る」（rigs pa）と訳されている。See Jñ 274b7: ... **gcig po de yul la sogs pa ste / dus dang gnas skabs nges pa'i bye brag bzhin du gzhan du ste / du mar ni rigs pa ma yin te** /（場所等、つまり時間と状態に関して確定し〔、故に〕異なっている〔諸の個物〕の如き単一〔の实体〕が別異である、即ち多であるということはあり得ない）。

個物 (a) と結合し [、それ故に、この個物 (a) と結合しているという一つの本質的な特性を既に有し] ており、[専ら] このことによって、[単一の実体は、個物 (a) との結合によって] 限定されない³⁰ [、他の個物 (b, c, d, ...) と結合するという] 別の本質的特性³¹、[即ち多性³²] を欠いているからである (*deśakālāvasthāviśeṣanīyataikavyaktisamsargāvyavacchinnaśvabhāvāntaravirahāt)³³。

³⁰ See Dh 8a2: **rnam par ma bcad cing khyad par du ma byas pa'i rang bzhin (gzhan gang yin pa des stong pa ...)** [(そ [の或る個物 (a) と] の結合によって) 限定されない、即ち区別されない (別の) 本質的特性 (を欠いている……)] ; PVBhT(Ya) 19b8 (ad PVBh p. 476, 1f.). PVBh では (-samsarga)vyavacchinna-となっているが、PVBh(Tib) 154b6 では(...'dres pas) rnam par ma bcad pa (-avyavacchinna)となっている^②。

Jñ (274b5-6)では、-samsargāvyavacchinna-は rnam par ma chad par 'dre ba (= 'brel pa)と訳されているようである。See Jñ 274b5-6: ...⁺**gsal ba gcig dang, rnam par ma chad pa** zhes bya ba (D; ba'i P) spyi'i **rang bzhin** cha shas lus pa med par(?) spyi rdzogs pa'i bdag nyid, **'dre** (D; 'dri P) ste 'brel bar (P; par D) 'gyur te /⁺ spyi la de dang 'brel pa'i (ba'i P D) rang bzhin gcig las **gzhan** ma 'brel pa'i (ba'i P D) rang bzhin med pa'i phyir ro (*sāmānye tatsambaddhaikasvabhāvād anyasyāsambaddhasvabhāvasvabhāvāt 等) ... (+...⁺ チベット語訳は明瞭でないが、ジュニャーナシュリーパドラの解釈をおよそ次のように理解した。*-ekavyaktināvyavacchinna ity anamśo 'mūrtāḥ sāmānyasya svabhāvaḥ ... (-ekavyaktinā) samsrjyamānaḥ sambadhyamānaḥ 等); ibid 277a2 (ad PVin III 287a1-2): rnam par ma chad par 'brel (P; 'drel D) ba (zhes sngar **ji skad smos pa** du ma'i **rang bzhin gyis stong par khas blangs pa ...)**). ジュニャーナシュリーパドラの解釈は、*-ekavyaktisamsargo 'py avicchinnaḥ svabhāvaḥ, tatsvabhāvād anyena (i.e. asambaddhasvabhāvena) rahitaḥ, taddhetoh となろう。この解釈に従えば、当該の複合語は次のように訳されよう。「何故なら、[単一の実体は、] 場所、時間、状態に関して確定した個物と結合し [、かつこの個物によって] 限定されない、そ [のような] 本質的特性とは別 [の本質的特性] を欠いているからである」、と^③。

³¹ ダルモウッタラは svabhāvāntara を次のように言い換える。Dh 8a3: gtan tshigs kyi don ni nges pa'i rang bzhin gyi (P; gyis D) gsal ba dang 'brel pa'i (P; ba'i D) rang bzhin las rang bzhin gzhan med pa'i phyir ro zhes bya ba yin no // (確定した本性を有する個物と結合している本質的特性 (即ち単一性) とは別の本質的特性が存在しない故に、というのが論証因の意味である)。See rGyal 28, 4-5: (nges pa'i **gsal ba gcig kho na dang 'brel pas** (bas in text) **rnam par ma bcad cing khyad par du ma byas pa'i**) gcig gi **rang bzhin** las **gzhan** du ma nyid **kyis stong pa'i phyir** / (... ma byas pa'i は gcig gi rang bzhin ではなく、gzhan に係っている)。^④

³² See Bu 339, 2-3: **rang bzhin gzhan gyis stong pa** ste du mas stong pa'i **phyir** /; ibid. 339, 3; rGyal 28, 5; Jñ 277a2 (研究 II.1 の注 32 を見よ)。^⑤

³³ 単一の実体に対する論駁については、これと類似した思惟方法を TSP にも見出すことができる。TSP p. 251, 10-13: tenaivāvayavena tasya kroḍīkṛtatvāt kuto 'vayavāntare vartitum asyāvasaras tadānīm eva syāt. anyathā hi yady anyatrāpi varteta, tadātrābhimite dravye tasya vṛttiḥ sarvātmanā na bhavet. na hi tasyāparaḥ svabhāvo 'sti, yenānyatrāpi varteta, ekatvāhānīprasāṅgāt ([単一者、即ちニャーヤ学派等によれば、或る一部分に含まれているとされる全体一者の本性は、同じ本性を有したまま、他の部分に存在することはできない。つまり、] そ [の全体一者] はその当該の部分に含まれている故に、こ [の全体一者] に、全く同じ時に別の部分に存在する余地がどうしてあろうか。何故なら、そうでない場合、即ち [単一の全体一者が] 別 [の部分] にも存在する場合、そ [の全体一者] は、こ [のニャーヤ学派等によって] 誤って意図されたもの (最初の部分) には全く存在しないからである。というのは、[或る部分に存在するという一つの本質的特性を既に有している] そ [の全体一者] には、[その全体一者が] 別 [の部分] にも存在することができるような、他の本質的特性が無いからである。[それにも拘わらず、もしそうした特性

【論証因の根拠】[不可分で単一の实体] —— [既に] そのような一つの本質的特性（即ち単一性³⁴、または多性の欠如）を有している——が、[それに加えて、更に別の特性、即ち多性を有し、故に、不可分で単一の实体がそれぞれ] 異なった場所[、異なった時間、異なった状態]にて存在する諸[の個物 (b, c, d, ...)] と結合することは矛盾するからである（*tathābhūtasvabhāvasya virodhād bhinnadeśādiyogena）（PVin III 286a5-6）³⁵ ⑥。

この論証で用いられている個々の概念は、詳しく説明されてはいるものの分かり易くはない。その為、この論証を明瞭に理解することは難しく、論証の構成について何通りかの解釈のあることが予想される。まず初めに我々は、法称によって構成されたこの論証の実例を帰謬法と見なすべきか、それとも帰謬還元法と見なすべきかという困難な問題に突き当たる。こうした解釈を巡る問題を解明するには、法称の後継者達が実際にそのような相反する解釈を表しているという事実に基づく必要があろう。ダルモータラの解釈によれば、この論証は帰謬還元法を表しているという。一方プラジュニャーカラグプタは、この論証は帰謬法も帰謬還元法も示し得るとして、両方の可能性を挙げている。こうした相違がどうして生じたのか理解する為には、論証の個々の要素に関する解釈の相違に留意しなければならない。この相違を調べることは論理的に重要である。何故なら、後継者達の異なった解釈は、帰謬法と帰謬還元法の構成と関連する問題意識、例えば「帰謬法の立論者には存在しないものと見なされている普遍等がどうして帰謬法の論証主題として認められるのか」、或いは「存在しない論証主題にどうして論証因の存することが認められるのか」という問題意識から生じているからである。こうした解釈の相違からは、実例に限定された帰謬法と帰謬還元法の特徴のみならず、この二つの論証法の本質的かつ一般的特徴もまた明らかになる。故に、差し当たって、法称により構成された論証について後継者達が提示した種々の解釈を考察しよう。

があるならば、その全体一者は異なった諸部分に存在する故に、ニャーヤ学派等に前提されている] 単一性を失ってしまうからである)。

上記の箇所を教示して頂いた船山徹氏に感謝する。

³⁴ See Dh 8a6: *de lta bu'i zhes bya ba ni gcig gi rang bzhin no* // [そのような (*tathābhūta-) とは、単一なる本質的特性を有するものである] ; Jñ 274b8.

³⁵ PVBh p. 476, 1-3 に引用。See NBhūṣ p. 231, 6-7. この箇所を引用している文献については、Tani [1987: 10, n. 19] を参照。

II.1 法称の論証に関するダルモータラの解釈

法称の論証を解釈するのが難しい理由の一つは、論証因と帰結の記述が漠然としていることにある。もしかしたらこの点を考慮に入れたのであろうか、法称の後継者達はその論証を簡略な形式にしようと試みている。法称の論証をより分かり易くする為に、以下の考察では後継者達が採用した簡略な形式の論証に基づいて論を進めることにする。

論証の形式を決めるには、その包摂関係の形式を確定しなければならない。ダルモータラは次のような包摂関係を採用する。

〔それぞれ〕異なった場所に存在している〔諸の個物〕と結合していること（*bhinnadeśayoga）は、〔その諸の個物の様々な特性を備えている故に、〕多〔性〕（*anekātman）によって包摂される（*vyāpta）。その場合、〔単一の実体、例えば普遍の〕単一性（*ekatva）は、実に（*eva）、能摂〔特性〕である多性（*anekabhāva）と矛盾し、従って、所摂〔特性〕である多くの個物と結合すること〈と〉も実際に矛盾するのである。

Dh 8a7-8 (ad PVin III 286a6): yul tha dad pa dang ldan pa ni du ma'i bdag nyid can gyis (?) (gyi P; om. D) khyab pa yin no / de la gcig nyid ni khyab par byed pa du ma'i dngos po (D; om. P) nyid dang 'gal ba'i phyir / khyab par bya ba (P; byed pa D) rdzas du ma dang ldan pa <dang> (?) yang 'gal ba dngos po la yod pa yin te /

この第一文から、論証において前提されるべき包摂関係——異なった場所に存在する諸の個物との結合（bhinnadeśayoga）は多性（anekatva）によって包摂される——を読み取ることができる。bhinnadeśayoga とは、多くの個物に存在すること（anekavṛttitva, 多個物存在性）を意味する。従って、包摂関係は次のようになる。

多個物存在性は、多性に包摂される³⁶。



³⁶ See Dh 8b1ff.; ibid. 9a3-4（翻訳については研究 II.1 を見よ）。See also PVV p. 367, 23f.: bhinnadeśakālādiṣv anekāsu vyaktiṣu vṛttasya tatadadeśatvādiviruddhadharmādhyāsād anekatvasiddher anekavṛttitva- (-vṛttatva- in text) -anekatvayor vyāptisiddhir boddhavyā (Tillemans [1986: 156] に英訳).

上に訳出した最後の一文において、ダルモータラは実体の**単一性**を前提とし、単一性が多性（*anekatva*）（Q）と矛盾することに注意を向けている。この矛盾からダルモータラは、「多個物存在性」（*anekavṛttitva*）（P）を包摂している能摂特性（＝「多性」（Q））は単一性と矛盾する故に、所摂特性（＝「多個物存在性」）もまた単一性と矛盾する、と推論する。これは、実体における「多性」（Q）も「多個物存在性」（P）も、実体の単一性とは矛盾する故に、論証の立論者の立場からは認められない、ということを含意している。こうした理由から、ダルモータラは次の見解を提示する。即ち、当該の箇所において、法称の実例は二つの特性（PとQ）の欠如に関する次のような命題、具体的には、「[例えば普遍の如き単一の實體においては、] 能摂〔特性〕（Q）である多性（**anekatva*）が欠如している故に、[その普遍には] 所摂〔特性〕（P）である多〔個物〕存在性（**anekavṛttitva*）が欠如している」（Dh 8a8-b1: (des na 'gal ba'i phyir ro (P) Vin III 286a6, 上記の翻訳を見よ)^⑦ zhes bshad do // des na 'dir khyab par byed pa du ma nyid med pas khyab par bya ba du ma la yod pa nyid med par (brjod pa yin no //)) という命題を内容としている、と。以上の見解から、ダルモータラが法称によって論式化された論証の実例を次のように理解していることが読み取れる。

もし単一である普遍（*sāmānya*）（S）（＝**論証主題**）において、「多性（*anekatva*）の否定」（～Q）（＝能摂特性、**論証因**）が所属するならば、その場合、そこには「多個物存在性（*anekavṛttitva*）の否定」（～P）（＝所摂特性、**帰結**）が所属する。何故なら、多性の否定（～Q）は、多個物存在性の否定（～P）によって包摂されているからである。

法称の論証に関する上述の解釈を法称自身の言説と比較すれば、法称の論証の個々の要素に関するダルモータラの解釈を次のように理解することができる。

	法称	ダルモータラ
pakṣa（論証主題）	eka	sāmānya 等（単一の實體）（S）
hetu（論証因）	svabhāvāntaraviraha	anekatva の欠如（～Q）
sādhya-dharma（帰結）	na anyena yogaḥ	anekavṛttitva の欠如（～P）

法称によって構成された論証に関するダルモータラの解釈の簡略な形式：

$$sāmānya (S) : (\sim anekatva (\sim Q) \rightarrow \sim anekavṛttitva (\sim P))$$

しかしながら、ダルモータラがこの論証を帰謬法として理解しているのか、それとも帰謬

還元法として理解しているのかは未だ判然としない。ダルモータラの論証の型を確定する為に、法称の言説、即ち、もし帰謬法において帰結 (Q) が (真であると) 認められないならば、帰結 (Q) も論証因 (P) も否定されるという言説に立ち戻ろう (see PVin III 286a7; 286b3; b3-4)。思考過程から考えると、この言説の基底にあるのは次のような点である。帰謬法は論証因 (P) と帰結 (Q) の否定的随伴関係という考え方に、つまり「論証因の否定」($\sim P$) による「帰結の否定」($\sim Q$) の包摂に基づき、故に帰謬法は否定的随伴関係を含意しているということである。この包摂関係は、帰結が立論者にとって真である論証、即ち帰謬還元法の基盤である。従って、帰謬還元法に関する法称の思考過程を次のように解することができる。つまり、帰謬法 ($S : P \rightarrow Q$) では、初めに帰謬法の帰結 (Q) が論証主題 (S) において前提されている特性 (A) と矛盾する故に否定され、次にこの帰結の否定 ($\sim Q$) によって、帰謬還元法 (=X から Y を証明すること) の為の換質换位された包摂関係 ($\sim Q \rightarrow \sim P$) が成立し、その場合、帰結の否定 ($\sim Q$) という論証因 (=X) から「論証因の否定」($\sim P$) という帰結 (=Y) が導き出されるのである、と。

これに類似した考え方が、先に訳出したダルモータラの説明の中に看取される。ダルモータラの言う所によると、普遍 (S) の「多性」(anekatva) (Q) は、単一である普遍 (S) の単一性 (A) と矛盾する故に否定され、このように多性 (Q) を否定することによって、「多個物存在性」(anekavṛttitva) (P) もまた否定される。このことにより、「anekavṛttitva の否定」による「anekatva の否定」の包摂 ($\sim Q \rightarrow \sim P$)、つまり「anekatva の否定」($\sim Q$) という論証因 (X) から「anekavṛttitva の否定」($\sim P$) という帰結 (Y) が導出される論証の為の包摂関係が成立するのである。

もしこうしたダルモータラの思考過程を法称のそれと比較すれば、恐らく次のことが認められよう。即ち、否認されるべき **anekatva** (Q) は帰謬法において否認されるべき帰結 (Q) に対応し³⁷、一方、承認されるべき「帰結の否定」($\sim Q$)、即ち「anekatva の否定」($\sim Q$) は帰謬還元法の論証因 (X) ³⁸に、そして承認されるべき「anekavṛttitva の否定」($\sim P$) は帰謬還元

³⁷ See Dh 9b1 (ad PVin III 286a6-7, 翻訳については研究 I.1 を見よ): ... thal bar 'gyur ba de ni khyab par bya ba'i chos gcig du ma la 'jug pa nyid khas blangs na / khyab par byed pa gzhan du ma nyid khas blangs pa bstan pa'i phyir yin te / [……その帰謬法 (*prasaṅga) は、多く [の個物] に存在すること (*anekavṛttitva) という或る所撰 (*vyāpya) 特性 (論証因 (P)) が認められるならば、多であること (*anekatva) という他の能撰 (*vyāpaka) [特性] (帰結 (Q)) が認められることを示す目的がある] (Tani [1987: 9, n. [19]] に英訳)。このダルモータラによって論式化された帰謬法の場合、帰結 (Q) anekatva は論証因 (P) anekavṛttitva から導出される。

³⁸ Dh 9a5f.を参照、翻訳については研究 II.1 を見よ。See Dh 9b1-2 (ad PVin III 286a7): khyab par byed pa (D; par P) de[s] khas mi len na khyab par bya ba dang khyab par byed pa'i chos gnyi ga ldog par 'gyur ro zhes pa ni bzlog pa'i don to // [[また、] その能撰 [特性 (anekatva)] が承認されないならば (*anabhyupagame)、所撰 [特性 (anekavṛttitva)] と能撰 [特性 (anekatva)] の二つ [の特性] が否定される、というのが [帰謬] 還元法の意味 (*viparyayārtha) である] (Tani [1987: 9, n. [19]] に英訳)。ダルモータラにより論式化された帰謬還元法の場合、所撰特性

法において承認されるべき帰結（Y）に対応する、と。

帰謬還元法において、論証因（X）、即ち普遍における「*anekatva*（多性）の否定」（ $\sim Q$ ）は、普遍に前提されている単一性とは矛盾せず、その為、帰謬還元法の立論者自身に承認されているので、論証因が妥当である為の第一条件を満たしている。もし論証因が立論者によって承認されるならば、この論証因を包摂している帰結、即ち普遍における「*anekavṛttitva* の否定」（ $\sim P$ ）も真として承認される。真として承認される帰結は、帰謬法の帰結ではなく、**帰謬還元法の帰結**である（Dh 9a4-5 参照、下記の翻訳を見よ）。

従って、ダルモータラの論証——「普遍は多でない（=*anekatva* の否定）故に、多くの個物に存在しない（=*anekavṛttitva* の否定）——は、あり得べきでない帰結の導出、つまり帰謬法を示すのではなく、立論者の見解の表述、即ち帰謬還元法を表しているのである³⁹。故に、ダルモータラの解釈に従えば、**法称はその実例によって帰謬還元法を表明しているのである**⁴⁰

（*anekavṛttitva*）の否定は能摂特性の認容の否定（即ち *anekatva* の否定）に基づいて導出される。故に、ダルモータラの帰謬還元法における論証因は *anekatva* の否定に他ならない。

³⁹ See PVV p. 367, 20-21: *yathā nānekam (cānekam in text) sāmānyam tasmān nānekavṛttī viparyaya-prayoge sādhyābhāve sādhanābhāvaḥ kathyate* [例えば、普遍は多でない。それ故に多く〔の個物〕に存在することがない。以上の〔帰謬〕還元法の論証式では、〔論証主題である普遍において、〕所証〔特性（*anekatva*）〕が存在しない場合に能証〔特性（*anekavṛttitva*）〕が存在しないことが述べられる〕。See Tillemans [1986: 156f.] .

⁴⁰ 帰謬法では、論証因（P）（*vyāpya*）も帰結（Q）（*vyāpaka*）も立論者によって承認されることはない。それ故、立論者は両者（P と Q）の否定を意図している（see Dh 7b4-5）。両特性の否定によって構成される論証が帰謬還元法である。当該の原文において、法称は、論証因「*vyāpaka* の否定」、即ち「単一の実体（例えば普遍）が多であること（*anekatva*）（Q）の否定」に基づいて、あつてはならないとされる特性、即ち「（単一の実体が）多く（の個物）に存在すること」（*anekavṛttitva*）（P）を論駁している。従って、論証因「多性の否定」（ $\sim anekatva$ ）は、帰謬法ではなく帰謬還元法の論証因である。

そうでない場合〔、つまりこの論証因（ $\sim anekatva$ ）が帰謬法の論式に用いられ、故に帰謬法と帰謬還元法がそれぞれ次の定式

帰謬法 $sāmānya : (\sim anekatva/ekatva \rightarrow \sim anekavṛttitva)$ ⁽¹⁾

帰謬還元法 $sāmānya : (anekavṛttitva \rightarrow anekatva/\sim ekatva)$ ⁽²⁾

により構成される場合〕、本質的特性の対偶（**viparyaya*）、即ち、普遍は多く〔の個物〕に存在する故に（**anekavṛttitvāt*）単一ではないという〔帰謬還元法の言説〕は、〔立論者にとってあつてはならないとされる特性を〕導出する要因（**sādhana*）であつて、〔あつてはならない特性を〕否定する要因（**nivartana*, *nivartaka*）ではない〔、という意図されざる事態が生じる〕ことになろう。〔しかしこれは、帰謬法の対偶はあつてはならない特性の否定を目的とするという法称の教説に違背する⁽³⁾〕（Dh 9b3: *de lta ma yin na du ma la yod pa'i phyir spyi ni gcig ma yin no zhes bya ba'i rang bzhin bzlog pa ni sgrub par byed par 'gyur gyi* (D; *gyi* / P) *ldog par byed pa ni ma yin no* //)。

(1) この型の帰謬法の論式については、Dh 9b5 を参照。See Dh 9b5: *gang dag rang bzhin gzhan gyis stong pa ni gcig* (D; *cig* P) *nyid mtshon pa yin par bsams* (D; *gsams* P) *nas khyab par byed pa dang 'gal ba dmigs pa yin par byed pa* (de'i ltar na yang) ... (「他の本質的特性

（一覽表 10 を見よ）。

ダルモータラの解釈によると、法称は次のような帰謬還元法を実例として挙げているとされる。

帰謬還元法：

$$\text{sāmānya (S) : } (\sim \text{anekatva } (\sim Q) \rightarrow \sim \text{anekavṛttitva } (\sim P))^{41}$$

この論証因、即ち *anekatva* の欠如 ($\sim Q$) は、包摂関係 ($\text{anekavṛttitva } (P) \rightarrow \text{anekatva } (Q)$) における能摂特性の否定から成り立っている。故に、その論証因は能摂特性の非認識 (*vyāpakānupalabdhi*) と呼ばれる⁴²。

この帰謬還元法から、帰謬法を次のように構成することができる。単一である普遍における「多性」(*anekatva*) というあつてはならない特性は、先に述べたように帰謬法の帰結 (Q) に対応するから、帰謬法の論証因 (P) は、帰結 (Q) に包摂されている特性、つまり「多〔個物〕存在性」(*anekavṛttitva*) から成る。その場合、包摂関係 ($\text{anekavṛttitva} \rightarrow \text{anekatva}$) が真である

の欠如」（法称によって挙げられた論証因）は「単一性」(**ekatva*) と呼ばれると考えて、「〔他の本質的特性の欠如〕を、」包摂しているもの (*anekatva*) と矛盾するもの (*ekatva*) の認識 (**vyāpakaviruddhopalabdhi*) である〔論証因〕と見なす、そのような〔対論者達〕は……）。ここでは、

$$\text{anekavṛttitva } (= \text{vyāpya}) \rightarrow \text{anekatva } (= \text{vyāpaka})$$

という包摂関係が前提されている。

(2) この型の帰謬還元法の論式については、Dh 9b6-7 を参照。See Dh 9b6-7: ... du ma la yod pa nyid yin na ni gcig nyid ma yin no (D; no // P) zhes gcig dang 'gal ba du mas khyab par bya ba du ma la yod pa nyid dmigs pa ni thal ba las bzlog pa yin na / 【対論者】 帰謬還元法——「もし〔普遍に〕多〔個物〕存在性が所属するならば、〔そこに〕単一性は所属しない」——は、単一〔性〕と矛盾する多〔性〕に包摂されている、多〔個物〕存在性の認識 (**ekasya viruddhenānekena vyāptasyānekaṣṭvāsyopalabdhi-* 等) である〔論証因を用いて構成される〕。この帰謬還元法の論証因は *viruddhavyāptopalabdhi* である。Dh 13a2-6 も参照、研究 II.1 の翻訳を見よ。

(3) See PVin III 286a7 : de (帰謬法の帰結) khas mi len na ni chos gnyi ga ldog par 'gyur ro // (翻訳については研究 I.2 を見よ)。

⁴¹ See NVTṬ p. 476, 23-24: yat punar yad anekavṛtti tan nānā, anekavṛttiś cāyavy abhyupagata iti prasaṅgasādhanaṃ svabhāvaheṭuḥ. nānātvābhāvād anekavṛttitvābhāva iti prasaṅgaviparyayo vyāpakānupalabdhir iti (更に「或る敵者は反論する」)。およそ多く〔の個物〕に存在するもの、それは多である。しかし、全体一者は「多く〔の個物〕に存在する」と〔仮定的に〕認められている。〔従って、それは多であることになろう。このように構成される論証は〕帰謬論証であり、〔その論証因は〕自性論証因である。多性は、〔論証主題、即ち全体一者には実際には〕所属しない故に、「多く〔の個物〕に存在すること」〔も、その全体一者には〕所属しない。〔このようにして構成される論証は〕帰謬還元法であり、〔その論証因 (*nānātvābhāvatva*) は〕能摂〔特性〕(*nānātva*) の非認識である。この箇所についても船山徹氏から口頭で御教示頂いた。TarBh p. 26, 29-p. 27, 3 も参照。

⁴² Dh 9a3-6 を参照、翻訳については研究 II.1 を見よ。

ことは前提となっている。ダルモータラの解釈によると、帰謬法は以下の如くである。

もし「単一性を本性とする」普遍が多くの個物に存在するならば（*anekavṛtti*）、それは、単一性に反して多である（*aneka*）ことになる。何故なら、およそ多くの個物に存在するものは、常に多であるからである⁴³（Dh 9a5 を参照、下記の翻訳を見よ）。

帰謬法：

$$\text{sāmānya (S)} \times (\text{anekavṛttitva (P)} \rightarrow \text{anekatva (Q)})^{44}$$

主題所属性、即ち *anekavṛttitva* が普遍に所属することは対論者にのみ承認されるのであって、立論者自身には承認されない。この立論者による非承認を特に強調する場合には、コロンの代わりに「×」の記号をもって説示する。

帰謬法と帰謬還元法に関するダルモータラの見解は、次の箇所から読み取れる。

「それぞれ」異なった場所「、それぞれ異なった時間」等に存在する「こと」（**bhinnaviṣayādivṛtti*）は、相反する特性との結合（**viruddhadharmayoga*）に包摂されている。これはまた、多性（**anekatva*）「を意味しているの」であり、それ故に「それぞれ異なった場所等に存在することは、」多「性」それ自体によっても包摂される。こ「の、論証主題である普遍等における」能摂「特性」（多性）の非認識（**vyāpakānupalabdhi*）は、「立論者である仏教徒によって」成立している「ものと見なされる」（**siddha*）。従って、帰謬還元「論証」（**prasaṅgaviparyaya*）（即ち、「普遍が多くの個物に存在すること」という所摂特性の非存在の論証）の論証因は、まさにこ「の非認識」によって理解されるべきである。およそ多くの場所等に存在するもの（**anekaviṣayādivṛtti*）は、常に多である。「対論者の見解によれば、」普遍もまたそうである（即ち、多くの場所等に存在する）から、それは「常に」多であることになってしまう。「この言説は帰謬法を表す。」しかし、それは「決して」多ではない「故に、それぞれ異なった場所、異なった時間にて存在することはない。普遍が「多であることの否定」という論証因から成り立つこの論証は」帰謬還元法である。

Dh 9a3-6 (ad PVin III 286a5f.): yul tha dad pa la sogs pa la yod pa ni 'gal ba'i chos dang ldan pas khyab la / de yang du ma nyid yin pa'i phyir du ma'i bdag nyid kyis kyang khyab par

⁴³ See Dh 7b3: spyi la sogs pa **du ma la yod par** 'dod pa na / mi 'dod kyang du ma nyid du thal ba ('am /); ibid. 9b1 (研究 II.1 の注 37 を見よ); PVP p. 367, 16f.: **parakalpitaḥ** sādhanaiḥ **prasaṅgaḥ** kriyate, yathā sāmānyasya paropagatānekavṛttivād anekatvam āpādyate (see Tillemans [1986: 156f.]).

⁴⁴ 研究 II.1 の注 41 を参照。

'gyur ro // khyab par byed pa mi dmigs pa 'di ni grub pa yin pa'i phyir thal ba bzlog pa'i gtan tshigs ni 'di nyid las rtogs par bya ba yin te / 'ga' zhig yul la sogs pa (D; om. P) du ma la (P; om. D) yod pa de ni du ma nyid yin la / spyi yang de lta yin pa'i phyir du ma nyid du 'gyur na du ma nyid ma yin no zhes bya ba ni thal ba las bzlog pa'o //⁴⁵

もし法称によって構成された論証の実例は専ら帰謬還元法を表しているという見方をダルモータラが取るならば、帰謬法は文脈上どのように法称の論述と関連付けられるのかということが問われねばならない。何故なら、法称は当該の箇所において帰謬法の実例を論じているからである。この点について、ダルモータラは次のような見解を示している。即ち、ここで帰謬法は、*anekavṛtter ekasya na ... anyena yogah* (PVin III 286a5) という表現の中の *anekavṛtti* の語によって示唆されてはいるが⁴⁶、論式化されてはいない。よって、帰謬法は帰謬還元法を用いて間接的に構成されるのである、と⁴⁷。

恐らく、こうしたダルモータラの見解の根底にあるのは、帰謬法と帰謬還元法の関係に関する彼の考え方である。ダルモータラの考えによれば、帰謬法は帰謬還元法の論式化を目的として作られるという。

対論者に [のみ論証主題に所属するものとして] 構想されている (*parikalpita) [論証因] から [対論者にとって] あつてはならない帰結を導出する論証 (*prasaṅga-) は、論証因 [が帰謬法の論証主題に所属すること] が成立していない故に、[立論者] 自らの立場からは (*svatantra) 構成されない。むしろ、[帰謬法は、これが] 帰謬還元法を目的としている (／帰謬還元法に基づいている) (*niṣṭha) ことを示す為 [に論式化されるの] である。

Dh 9a7 (ad PVin III 286a5f.): *gzhan gyis kun brtags pas thal bar sgrub pa gang yin pa ni rang rgyud du bya ba ma yin te / gtan tshigs ma grub pa'i phyir ro // 'on kyang thal ba bzlog pa'i mthar thug pa yin no zhes bstan pa'i phyir ro //*

⁴⁵ Tani [1987: 9, n. [19]] に部分的に英訳。

⁴⁶ See Dh 8a5-6 (ad PVin III 286a5): *du ma la yod pa gang yin pa ste 'dis ni thal bar 'gyur ba'i don ston par byed de / (P; om. D) du ma la yod par 'dod pa'i gcig po gang yin pa de la thal ba 'dir 'gyur ro zhes bya ba'i don to //* (**anekavṛtti* (多く [の個物] に存在すること) という表現に関して言うと、それは帰謬法の内容を示している。即ち、[対論者の] 見解によれば多く [の個物] に存在する [とされる論証主題、つまり] 単一 [の実体] に、こうしたあつてはならない帰結が所属することになってしまう、という意味である) . rGyal (27, 3-4)におけるこの箇所の引用も参照。

⁴⁷ See Dh 9a8 (ad PVin III 286a5f.): *don gyis rtogs par bya ba'i thal ba bzlog pa ni dper brjod par byas la / dngos su dper brjod par bya ba'i thal bar 'gyur ba ni rtogs par byas (D; bya bar byas P) pa yin no //* ([当該の文においては、通常、帰謬法から] 間接的に (*arthāt) 理解され得る帰謬還元法が実例として挙げられている。一方、[文脈上] 直接 (*sākṣāt) 実例を挙げなくてはならない帰謬法は [帰謬還元法から間接的に] 理解される) .^⑧ Tani [1987: 8f., n. [19]] に部分的に英訳。

帰謬法においては、論証因が論証主題に所属することも、その帰結も、真なるものとしては確定されない。従って、帰謬法が立論者自身の見解の証明を目的として論式化されることはない。むしろ、それが論式化される目的は、帰謬法を用いることによって、次の点を示すことにある。即ち、帰謬法は帰結が立論者の立場から承認され得る帰謬還元法に基づいており、これを目的としているということである。その為、当該の原文では、帰謬法の実例が問題となっているが、帰謬法はただ間接的に理解されるべきなのである。一方これとは逆に、文脈からすれば間接的に論式化されるはずの帰謬還元法は明確に説示されている⁴⁸。この点で、ダルモータラの見解は次の如く認められよう。即ち、立論者の立場から論式化される帰謬還元法は帰謬法を含意し、反対に帰謬法は帰謬還元法を間接的に示す、つまり、こうした種類の帰謬還元法は理論的に常に帰謬法から論式化することができるのである、と。この見解は、そのような帰謬還元法は常に帰謬法から作られるとは限らないとするプラジュニャーカラグプタの見解と対立する（II.3を見よ）。

帰謬法は常に帰謬還元法を目的とするというダルモータラの見解が基づくのは、帰謬法は帰結による本来的（maula）論証因の包摂を確立するという意味で成立させる要因であるという法称の見解である（研究 I.3 を見よ）。この場合、本来的論証因は帰謬還元法の論証因に対応する。帰謬法の機能に関する法称の見解を明らかにする為に、「本来的」という概念に対するダルモータラの解釈を見ておこう。これは、ダルモータラが論証因の本来性を帰謬法との関連においても論述していることによる。

「[論証因が本来的である]と[言うの]は、[一方では、結果または目的に関して、即ち、帰結が立論者自身によって真として確定される帰謬還元論証を]企図する[(確立する)という点で]、また[他方では、帰謬還元論証を]企図する契機（*nimitta）[であるという点で、そのことが述べられたの]である。或る目的の為に（具体的には、帰謬還元法の確立という目的の為に）帰謬法が論式化される場合、それは本来的である（*yadarthaṃ prasaṅgaṃ karoti (/ prasaṅgakaraṇaṃ) tad maulam 等）。帰謬論証に基づいて、必ず或る何らか[の論証、即ち帰謬還元法]を確定すること（*niś-√ci）が意図されている。また、確定の原因とは、論証因が[論証主題に]存在する（*siddha）ことである……。

⁴⁸ See Bu 338, 6: *thal ba ldog pa'i mthar thug par bstan pa'i phyir thal 'gyur zhugs la bstan nas rang rgyud dngos su bstan pa la*; rGyal 27, 4: *bstan bya'i gtso bo thal 'gyur yin yang, rang rgyud (→ prasaṅgaviparyaya) dngos su bstan pa'i dgos pa ni thal ba de nyid zlog pa'i mtha' can du shes par bya ba'i ched yin no //*.

Dh 12b6-7 (ad PVin III 286b6): **rsta ba** ni rtsom par 'gyur ba (D; gyur pa P) dang rtsom pa'i rgyu mtshan te / gang gi don du thal bar byed pa ni rtsa ba yin no // thal ba byed pas ni gdon mi za bar 'ga' zhig nges par byed 'dod pa yin no // nges pa'i rgyu mtshan yang gtan tshigs grub pa yin pa ...⁴⁹

このように一方では、もし帰謬法が帰謬還元法（つまり帰謬還元法の真なる帰結）を確定することを目的として論式化されるならば、帰謬還元法の論証因は本来論証因となる。また他方では、もし帰謬還元法を確定する契機である、論証主題における論証因の存在が真として成立するならば、本来論証因が重要となる。以上の箇所から、論証因の本来性には二つの側面、即ち、帰謬還元法の帰結が真であることを確定するという側面と、その論証因が真であるという側面があることが読み取れる。第一の側面、つまり帰謬法は本来論証因から真なる帰結を導出する帰謬還元法を目的とするという側面が意味するのは、帰謬法——「P が S に所属する場合、Q は S に所属する」($S \times (P \rightarrow Q)$)——は、帰謬還元法——「Q が S に所属しない故に、P は S に所属しない」($S : (\sim Q \rightarrow \sim P)$)——を論式化する契機となるという点である。換言すれば、帰謬法はその包摂関係 ($P \rightarrow Q$) によって、帰謬還元法という論証の為の包摂関係（換質換位された包摂関係 ($\sim Q \rightarrow \sim P$)) を間接的に示しているのである。ダルモータラは帰謬法のこうした機能を次のように解釈する。

[帰謬法の論証因／帰謬法は、] 単に包摂関係 (*vyāpti) [$(P \rightarrow Q)$ 、例えば、]「多く [の個物] に存在するもの (P) は必ず多である (Q)」を示すだけであるものの、成立させる要因 (*sādhana) である。何故なら、それは、[証明されるべき帰結とは反対の領域において ($\sim Q$) (sādhavyaparyaye) 論証因を] 否定する ($\sim P$) 妥当な認識 (*bādhakapramāṇa) を間接的に示す (*ā-√kṣip) からである⁵⁰。

Dh 12a8-13a1 (ad PVin III 286b6): gang zhig du ma la yod pa de ni du ma nyid do zhes khyab pa rab tu ston pa tsam yin yang gnod par byed pa'i tshad ma 'phen pa'i phyir sgrub par byed pa yin no //

このように、ダルモータラの見解によると、帰謬法には bādhakapramāṇa⁵¹を間接的に示す

⁴⁹ See SyVR p. 554, 14-15: ... maulahetuparikaratvād asya (i.e. prasaṅgasya). avaśyam eva hi prasaṅgaṃ kurvato 'rthaḥ kaścin niścāyayitum iṣṭaḥ. niścayaś ca siddhahetunimitta iti ... この文 (Dh 12b6-13a2) は、Tani [1987: 15f., n. [26]] に英訳されている。

⁵⁰ See Bu 342, 4-5: (研究 I.3 の注 22 を見よ); SyVR p. 554, 17-18: (yat sarvathaikaṃ tan nānekatra sambadhyata iti) vyāptidarśanam api hi bādhakaṃ (viruddhadharmādhyāsam) ākṣipatīty anyo 'yaṃ sādhanaprakāraḥ.

⁵¹ bādhakapramāṇa については、HB p. 4*, 3ff.; Mimaki [1976: 242ff.] ; Steinkellner [1991: 313ff.] ;

機能がある。

帰謬法と帰謬還元法の論理的構成の解釈に関する限り、それは、ダルモータラの注釈に基づいた説明では未だ論じ尽くされていない。その構成についてはなお別の可能性が残されている。というのも、その可能性は少なくとも論証の個々の要素に関する解釈の次のような選択肢に依拠しているからである。

論証主題（普遍等）を実在の事物と捉えるか否か。論証因「他の本性の欠如」（svabhāvāntaraviraha）、即ち多性の欠如を多性の単なる否定と捉えるか、或いは多性ではない別の特性の肯定と捉えるか。帰結を立論者の自説と捉えるか、それとも対論者説の単なる否定と捉えるか。

事実、ダルモータラとプトンはその構成に関する様々な解釈に言及している⁵²。そうした解釈は大体二種類に区分することができ、それらはダルモータラ型の解釈、またはプラジュニャーカラグプタ型の解釈にそれぞれ対応する。

既に記したように、ダルモータラの解釈は次のように論式化される。

帰謬法：

単一性を本性とする普遍等（論証主題）に多個物存在性（anekavṛttitva）が所属するならば、そこには多性が所属するであろう。

$$\text{sāmānya} \times (\text{anekavṛttitva} \rightarrow \text{anekatva})$$

帰謬還元法：

普遍等には多性の否定が所属する故に、そこには多個物存在性の否定が所属する。

$$\text{sāmānya} : (\sim \text{anekatva} \rightarrow \sim \text{anekavṛttitva})$$

この場合、ダルモータラは、PVin III の当該の箇所では帰謬法ではなく**帰謬還元法**が法称によって説明されていると考えている。（一覧表 10 を見よ）。ジュニャーナシュリーパドラ、プトン、ギェルツァップ・タルマリンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen）も同様の見解を示している⁵³（一覧表 11 を見よ）。

Tani [1991: 360ff.] を参照。

⁵² See Dh 9b5ff.; ibid. 13a2-6; Bu 338, 1ff.

⁵³ See Jñ 277a2-5 (ad PVin III 287a1-2); Bu 338, 6ff.; rGyal 28, 1ff.

しかしながら、Pvin III の当該箇所をその文脈に沿って読めば、それは別の仕方でも解釈することができる。というのも、この一節では**帰謬法**の実例が問題となっている以上、その箇所は、法称の挙げた実例は帰謬還元法ではなく帰謬法の実例に相当する、という形で理解できるからである。この解釈に従うと、ダルモータラの解釈とは反対に、帰謬法は「普遍が多く
の個物に存在することの否定」(anekavṛttitva) という帰結を指摘することになり、帰謬還元法は「普遍が多であること」(anekatva) という帰結を指摘することになる。こうした解釈は、後に分析するように、プラジュニャーカラグプタが提示している。プトンによると (see Bu 338, 1-2)、ヴィニータデーヴァ (Vinītadeva) とシャーンタパドラ (Rab tu zhi bzang, Śāntabhadra) も類似した解釈を取っているという。

ヴィニータデーヴァの解釈は以下の通りである。

普遍は、単一である〔と認められる〕故に、多く〔の個物〕に存在しないであろう（＝**帰謬法**）。〔これによって、〕あつてはならない帰結が導出される。従って、〔普遍は〕多く〔の個物〕に存在する故に、単一ではない（＝**帰謬還元法**）(Bu 338, 1: spyi chos can / du ma la yod par mi 'gyur bar thal / gcig yin pa'i phyir / thal ba las gcig ma yin te / du ma la yod pa'i phyir /) ⑨。

シャーンタパドラ (Rab tu zhi bzang) の解釈は以下の通りである。

普遍は、単一である〔と認められる〕故に、一つの個物とのみ結び付くであろう（＝**帰謬法**）。〔これによって、〕あつてはならない帰結が導出される。従って、〔普遍は〕多く〔の個物〕と結び付かない故に、多ではない（＝**帰謬還元法**）(Bu 338, 2: spyi chos can / gsal ba gcig kho na dang 'brel par thal / gcig yin pa'i phyir / thal ba las du ma yin te / du ma dang 'brel pa'i phyir /) ⑩。

上述の解釈は、ダルモータラが他の仏教徒の論敵の解釈と見なすものに近似している⁵⁴。その論敵達の解釈に対するダルモータラの考えによれば、彼らの論証因は帰謬法の場合のみならず、帰謬還元法の場合においても真なるものとして成立せず、故に本来的論証因 (maulo hetuḥ) ではないという。

しかし、そ〔の他の論証式〕の場合、帰謬法の論証因と、更に帰謬還元法の論証因も〔それぞれ〕本来的〔論証因〕ではあり得ない。何故なら、〔これらの論証因が論証

⁵⁴ See Dh 9b5-7 (研究 II.1 の注 40 を見よ); ibid. 13a2-6 (翻訳については前出の研究 II.1 を見よ)。

主題に存在することは] 成立しない (*asiddha) からである。例えば、或る [対論者] は次の如く反論する。もし普遍が単一であるならば、普遍はその単一性の故に多く [の個物] に存在しないであろう (= 帰謬法)。しかし [実際には、] 普遍は [対論者のヴァイシェーシカ学派等によって] 「多く [の個物] に存在する」 [と考えられている]。従って、普遍は単一ではない (= 帰謬還元法)、と。[この論証では、「多性」(anekatva) による「多個物存在性」(anekavṛttitva) の包摂 (つまりは、

anekavṛttitva (=vyāpya) → anekatva (=vyāpaka)

という包摂関係] が前提されている。] こ [の論証式] において、帰謬法の [論証因] (即ち ekatva) は [anekavṛttitva を] 包摂するもの [、即ち anekatva、] と矛盾するものの認識 (*vyāpakaviruddhopalabdhi) である。一方、[帰謬] 還元法の [論証因] (即ち anekavṛttitva) は [ekatva と] 矛盾する [特性、即ち anekatva、] によって包摂されているものの認識 (*viruddhavyāptopalabdhi) である。[しかし、] こ [の対論者によって構成される] 二つ [の論証因が論証主題である普遍に所属すること] は成立しない。

同様に、[或る別の対論者によって述べられた] 次 [の論証式] においては、自性論証因 (*svabhāvaḥetu) に [分類] される二つ [の論証因] は成立する [ものと見なされる] ことはない。[その論式は以下の如くである。] もし普遍が [、或る一つの個物と結び付き、それによってその個物と結び付くという本質的特性を有している場合に、] 他の特性 [、即ち他の個物と結び付くという特性、] の欠如という本性を有するならば、[その故に] 普遍は、或る [特定の] 場所 [、或る特定の時間] 等に存在するそのただ一つ [の個物] と [のみ] 結び付くであろう (= 帰謬法)。[しかし実際には、] 普遍は、[それぞれ] 異なった場所 [、異なった時間] 等に存在する多く [の個物] と結び付く [ということが、ヴァイシェーシカ学派等によって認められている]。従って、普遍は多性を本性とする (= 帰謬還元法)。

Dh 13a2-6: kha cig tu ni thal ba 'am thal ba las bzlog pa'i gtan tshigs kyang rtso bar mi 'gyur te / ma grub pa'i phyir ro // dper na kha cig na re gal te spyi gcig yin na ni (P; om. D) gcig yin pa'i phyir du ma la yod par mi 'gyur ba zhig na / du ma la yod pa yang yin te / de'i phyir gcig ma yin no zhes bya ba 'di la thal bar 'gyur ba khyab par byed pa 'gal ba dmigs pa dang / bzlog pa 'gal bas khyab pa dmigs pa gnyi ga ma grub pa dang / de bzhin du gal te spyi rang bzhin gzan gyis dben pa'i rang bzhin yin na ni yul la sogs pa gcig pu (D; pa P) can gcig pu zhig dang 'brel bar 'gyur ba zhig na / yul la sogs pa tha dad pa can du ma dang 'brel pa (ba P D) yin pa de'i phyir du ma'i rang bzhin yin no zhes bya ba 'dir (P; 'di D) rang bzhin gyi (P; gyis D) gtan tshigs gnyi ga ma grub pa bzhin no //

上で言及した二つの解釈に関して、第一の対論者による論式は次の図式で説明される。即ち、もし普遍（S）に単一性（P）が所属するならば、そこには多個物存在性の否定が所属するであろう（＝帰謬法）。普遍には多個物存在性が所属する故に、そこには単一性の否定が所属する（＝帰謬還元法）。

第一の対論者の解釈（1）は次の如くである。

帰謬法：

$$\text{sāmānya (S)} \times (\text{ekatva (P)} \rightarrow \sim \text{anekavṛttitva (Q)})$$

ekatva (P) は vyāpakaviruddhopalabdhi なる論証因である⁵⁵。

帰謬還元法：

$$\text{sāmānya (S)} \times (\text{anekavṛttitva (}\sim\text{Q)} \rightarrow \sim \text{ekatva (}\sim\text{P)})$$

anekavṛttitva (∼Q) は viruddhavyāptopalabdhi なる論証因である。

以上の論証式は、プトンがヴィニータデーヴァに帰する論証式に対応している。

第二の対論者の解釈は次のように図式化される。即ち、もし普遍に svabhāvāntara（他の本質的特性、即ち多性）を持たないという本性が所属するならば、そこには一つの個物とのみ結び付くことが所属するであろう（＝帰謬法）。普遍には多くの個物と結び付くことが所属する故に、そこには anekasvabhāva（即ち svabhāvāntara, 多性）が所属する（＝帰謬還元法）。

第二の対論者の解釈（2）は次の如くである。

帰謬法：

$$\text{sāmānya (S)} \times (*\text{svabhāvāntarahitasvabhāva (P)} \rightarrow * \text{ekenaiva yogaḥ (Q)})$$

⁵⁵ TSP の中にこれと類似した論証式のあることを船山徹氏より口頭で御教示頂いた。See TSP p. 250, 21-22: yad ekaṃ tad ekadravyāśritam, yathaikaḥ paramāṇuḥ. ekaṃ cāvayavisamjñītaṃ dravyam iti vyāpakaviruddhopalabdhiprasaṅgaḥ（[単] 一であるもの、それは一つの個物に [のみ] 依止している。例えば、[単] 一の極微の如し。しかし、「全体一者」と呼ばれるものは [単] 一である [と仮に認められている。従って、多くの個物に存在するとされる全体一者が一つの個物にのみ依止するという、意図されざる帰結が生じることになる。このようにして構成される論証は、anekadravyāśritatva を] 包摂する [特性]（即ち anekatva）と矛盾するものの認識 [である論証因（即ち ekatva）] によ [って推論され] る、あつてはならない帰結（即ち ekadravyāśritatva）の導出である）； ibid. p. 251, 14-16: yad ekavastukroḍīkṛtaṃ vastu na tat tadānīm evānyatra vartate, yathaikadhātrīkroḍīkṛtaḥ śīsur na dhātryantarakroḍam adhyāste. ekāvayavakroḍīkṛtaṃ ca dravyam iti vyāpakaviruddhopalabdhiḥ. 後者の推論において、立論者は包摂関係

（anyatra-vṛttitva → anekavastukroḍīkṛtatva）

を前提している。論証因（即ち ekavastukroḍīkṛtatva）は、anyatra-vṛttitva の能摂特性、つまり anekavastukroḍīkṛtatva と矛盾するものの認識である。

帰謬還元法：

$sāmānya (S) \times (*anekena\ yogah\ (\sim Q) \rightarrow *anekasvabhāva\ (\sim P))$

両論証因は本質的特性（svabhāva）たる論証因である。

以上の論証式は、解釈（2）の第一の論証因（P）、つまり、普遍が他の本質的特性の欠如という本性を備えていることが、多性の否定、即ち単一性（ekatva）と類似している点で、プトンがシャーンタバドラに帰する論証式におおよそ対応している。

ダルモータラの見解によると、これら四つの論証因は全て主題所属性、つまり論証因が論証主題に所属するという条件を満たさない。何故なら、論証主題は本来、推論の立論者（仏教徒）にとって実際に存在することはないからである。従って、如何なる肯定的な特性も、この存在しない普遍に論証因——具体的には「単一性（ekatva）」、「多個物存在性（anekavṛttitva）」、「他の本質的特性の欠如——これは単一性を意味する——という本性を有すること」、そして「他の個物と結び付くこと」——として所属することはない（一覧表 6 を見よ）。しかし、ダルモータラに従えば、次のように解される。即ち、法称は当該の箇所において帰謬法によって帰謬還元法を構成し、故に法称自身の見解を証明している。これは、帰謬還元法の論証因は成立しないもの（asiddha）ではないということを意味している。上述の二つの解釈（(1) と (2)）における論証因は全て成立しないものと見なされているから、これらの解釈は法称の原文の文脈とは一致しないのである、と⁵⁶。

上に言及された二つの解釈に対するダルモータラの論駁の根拠は、主題所属性は存在しない論証主題においては成立しないという点にある。しかしながら、もしダルモータラがこうした根拠を唱えるならば、対論者はダルモータラに対して次の問いを立てるはずであろう。即ち、どうしてダルモータラ自身は帰謬還元法の論式化に際して同じような苦境に陥ることがないのか、と。ダルモータラはこの問いに対する答えを用意している。即ち、**もし論証主題が或る事態の単なる否定に過ぎないならば**、つまり否定的な言葉で表現されるのであれば、論証因はそのような存在しない論証主題にも所属することができる、と答えるのである。ダルモータラの考えは次のように解釈される。即ち、推論の論証主題が実際には全く存在しない場合、それは、実在物に依拠している肯定的に表現された特性の拠り所であることはできない、と。故に、このような論証主題については、「これには何らかの特性が存在する」という肯定的な形では決して論述できず、「これには或る特性が**存在しない**」、または「これには或る特性が**欠如している**」という否定的な形でしか言及できないのである。ダルモータラが帰謬法を構

⁵⁶ See Dh 9b5ff.; Bu 338, 1-3.

成する場合、多個物存在性 (anekavṛttitva) という論証因は否定的に表現されてはいない。その為、本来的 (maula) 論証因が問題となることはない。これに対して、ダルモータラが帰謬還元法を構成する場合、例えば「多性の単なる非存在」(*anekābhāvamātra, du ma med pa tsam) (see Dh 9a6)、「能摂 (多性) の非存在」(vyāpakābhāva) (see Dh 7b5) という表現のように、論証因は否定的に表されている。このことが意味するのは、論証因は多性の単なる否定であって、多性とは別の何らかの肯定的な特性ではないということ、つまり、帰謬還元法の論証因を表現する際に用いられる否定は **prasajyapraṭiśedha** (純粹否定) の機能を有するのであって、paryudāsa (否定された概念とは別のものの肯定、例えば kṣatriya (クシャトリヤ) という意味での abrahmaṇa (バラモンに非ざる者)) の機能を有するのではないということである (一覧表 10 を見よ)。従って、帰謬還元法のこの特別な論証因に関してだけは、それが存在しない論証主題に所属し、故に主題所属性を満たすことが認められる⁵⁷。よって、独りこの論証因のみが本来的論証因なのである (一覧表 7 を見よ)。このことは、ダルモータラが帰謬法の節に対する注釈の冒頭で要約して述べている。

【問】論証主題 (*dharmin) [それ自体] は存在しない故に、[帰謬法の論証因、即ち] 所摂特性 (*vyāpyadharma) である「多 [個物] 存在 [性] 等」[が論証主題の「普遍」に所属すること] は成立しない (*asiddha)。どうして、こ [の成立しない所摂特性である論証因] から、[この存在しない論証主題に] 能摂特性 (*vyāpakadharmā) [が所属すること] をあり得べきでない帰結として導出すること (prasaṅga) ができるのか。というのも、認識手段 [によって確定されるの] ではない或る [事柄] を述べることは理に合わないからである。

【答】[まさに] この理由から、[具体的には、論証因と導出されるべき帰結とが我々にとっても真とは見なされない故に、] 我々は、こ [の当該の箇所 (PVin III 286a5ff.)] において、所摂[特性]の非存在 (*vyāpyābhāva) が能摂[特性]の非存在 (*vyāpakābhāva) に基づいて述べられていると考える (*iṣṭa, 'dod pa)。しかし、この能摂 [特性] (多性) の [単なる] 非存在は、[帰謬還元法の論証因として、例えば] 普遍等の [ように立論者である仏教徒にとっては] 存在しない[論証主題] にも必ず存在する (*siddha eva) [ことができる]。従って、[否定的な形で表現される] こ [の論証因、即ち多性の単なる否定] のみ (*eva) が、こ [の帰謬法の論述] において、本来的論証因 (*maulohetuḥ) と呼ばれるのである。何故なら、[この論証因は立論者によって] 意図された

⁵⁷ See Dh 7b5: khyab par byed pa med pa de ni spyi la sogs pa med pa la yang grub pa nyid do //; ibid. 9a6: du ma med pa tsam nyid ni spyi med pa <la> (?) yang grub pa yin no //; ibid. 12a4: du ma med pa nyid ni spyi la sogs pa ngos po med pa la yang grub pa yin no //; Bu 338, 4; Tani[1987: 9, n. [19]; 10f., n. [25]] .

〔帰結〕を理解させ〔得〕る（*abhīṣṭasya gamaka-）からである。

Dh 7b3-6 (ad PVin III 286a5ff.): chos can ma grub pa'i phyir du ma la yod pa la sogs pa khyab par bya ba'i chos ma grub pa des na khyab par byed pa'i chos su thal bar ga las (P; la D) 'gyur / tshad ma med pa ni brjod par mi 'thad do zhes na / de'i phyir 'dir khyab par byed pa med pa'i phyir khyab par bya ba med par brjod par 'dod pa yin no // khyab par byed pa med pa de ni spyi la sogs pa med pa la yang grub pa nyid do // de'i phyir mngon par 'dod pa go bar byed pa yin pa'i phyir de nyid 'dir rtsa ba'i gtan tshigs su brjod pa yin gyi /⁵⁸

上述の説明によって、ダルモータラの帰謬還元法の解釈を次のように図式化することができる。

普遍（sāmānya）◎（多性の純粹否定 → 多個物存在性の否定）

主題所属性の承認を強調する場合には、コロンの代わりに記号「◎」を用いて説示する。論証因は能摂特性の非認識（vyāpakānupalabdhi）である。論証因の主題所属性は成立しており、この論証因から立論者によって意図される（即ち、真と見なされる）帰結が推論される。従って、その論証因は本来的論証因である⁵⁹。

プトンとギェルツァップ・タルマリンチェンは、上記のダルモータラの解釈に従っている⁶⁰。その解釈によると、もし論証主題が存在しないならば、帰謬還元法の帰結は本来的論証因のように否定的な形で表現される。そして、その帰結は対論者説の否定から成り立っている。もし帰謬還元法の論証因における否定が単なる否定である点を考慮に入れるならば、帰結と論証因とは同一の論証主題に所属する以上、帰結における否定も単なる否定でなければならない。これは次のことを示唆していると考えられる。即ち、ダルモータラの見解では、立論者は確かに自身の立場から帰謬還元法を構成し、その帰結を真なるもの、つまりは自らの見解とするのであるが、立論者はそれによって対論者の見解の否定しか意図しておらず、その上、自らの見解を積極的には、即ち肯定的な形では表明しないということである。

帰謬法には主題所属性が成立しないという同じ欠点があるという反論に対し、ダルモータ

⁵⁸ Tani [1987: 9, n. [19]] に英訳。

⁵⁹ プトンによるダルモータラの見解の要約を参照。Bu 338, 3-4: **chos mchog** na re / gnyis ka'i (= Vinītadeva and Śāntabhadra) rang rgyud kyi rtags ma grub cing gzhung (= PVin III) dang mi 'grig go // des na / spyi chos can / du mar thal / du ma la yod pa'i phyir / thal ba las, du ma la med de / du mas stong pa'i phyir (= prasaṅgaviparyaya) / zhes thal 'gyur rang bzhin rtags kyis rang rgyud khyab byed mi dmigs pa 'phen la / khyab byed med pa de spyi med pa'ang grub bo zhe'o //.^⑩

⁶⁰ See Bu 338, 6-339, 5; rGyal 28, 3-30, 3.

ラは次のように答えている。帰謬法においては、論証因 (P) も帰結 (Q) も真なるものとして確定されるのではなく、その二つ (P と Q) が論証主題 (S) に存在することが疑わしいものとして示されるのである (chos gnyi ga the tshom du bstan pa)、と。言い換えれば、帰謬法の論証因の機能は、単に二つ (P と Q) の間の論理的包摂関係を示すだけである。これは、その存在が疑われる論証主題に関しても適用可能である (the tshom za ba la yang nus pa yin no //)⁶¹。

ところで、ダルモータラは、論証因が立論者によっても承認され得る、或る特殊な帰謬法を示唆している (一覧表 1 を見よ)。例えば仏教徒は、伝承された言葉は恒常的であるという見解を唱える者に対し、「存在性」(sattva) という論証因を用いて次のように帰謬法を構成する。即ち、言葉は存在している故に恒常的ではない、と⁶²。存在性の正確な意味が論者双方において同一でないということを考慮に入れなければ、「存在性」なる論証因は仏教徒にも承認される。その為、理論的には次のことが認められよう。仏教徒は、「言葉の非恒常性」という帰結が「言葉の恒常性」という対論者の見解と矛盾することを指摘することで、専ら帰謬法によって「言葉の非恒常性」という帰結を仏教徒自身の見解として導き出している。何故なら、論証因が真である故に、その帰結は仏教徒にとっても真と見なされるからである。従って、ダルモータラにおいては、論者双方に認められる論証因を用いて構成され、その為に対論者説の内部における矛盾の指摘と自説の主張という二つの側面を持った帰謬法が論式化される可能性が示唆されるのである⁶³。

⁶¹ See Dh 11b6-12a1.^②

⁶² See Dh 12a4-6 (ad PVin III 286b5, 翻訳については研究 I.3 を見よ): bzlog pa'i gtan tshigs grub na skyon med pa 'ba' zhiḡ tu ma zad kyi / 'on kyang thal ba'i gtan tshigs la yang ma (P; om. D) yin no // dper na rtag par smra ba rnam kyis khas blangs pa'i yod pas sgra mi rtag par thal bar grub pa bzhiḡ no // (もし換質换位 [された論証 (= 帰謬還元法)] の論証因が [立論者によって「論証主題に存在するもの」として] 成立するならば、[たとえ立論者が帰結を真として確定するとしても、論証因が成立しない、または対論者の見解を認めることによって主張 (pratijñā) が打ち消される、という] 過失はない。これは [この論証因の場合] だけではなく、帰謬法の論証因の場合にも適用される。例えば、[言葉の] 恒常性を唱える者達によって承認される (つまり、「論証主題である言葉に存在するもの」として成立する)「存在 [性]」[なる論証因] に基づいて、言葉は恒常的ではないという [彼らにとって] あってはならない [帰結] が証明されるが如くである) (1).^③

(1) Tani [1987: 10f., n. [25]] に英訳。

⁶³ プトンはこうした可能性に言及している。Bu 341, 6-342, 1: rang rgyud kyi **gtan tshigs**⁽¹⁾ tshad mas grub pa **yod na ni** / nges par 'dzin yang ma grub par 'gyur ba **ma yin no** // 'dir yang du ma med pa nyid spyi la grub pas so // thal ba la'ang rtags grub na nges par 'dzin yang skyon med de⁽²⁾ / dper na / rtag par smra bas khas blangs pa'i yod pas sgra mi rtag par thal bar sgrub pa bzhiḡ no // [妥当な認識根拠によって成立している自立論証因が[論証主題に]存在する場合、[帰結を真なるものとして] 確定的に見なすこともまた成立しないことはない。この場合でも、多性の否定 (anekatvābhāva) は [論証因として、論証主題である] 普遍において成立するからである。帰謬法においても論証因が [論証主題に存在するものとして] 成立しているならば、[帰結を真なるものとして] 確定的に見なすとしても過失はない。例えば、[言葉の] 恒常性を唱える者によって [論証主題である言葉に所属することが] 承認される「存在 [性]」[なる論証因] に基づいて、言葉は恒常

III 286a7-8): gang zhig du ma la 'jug pa de ni tha dad pa yin te / rdzas dang yul la sogs pa du ma la zhugs pa'i sngon po dang ser po lta bu'o zhes so //)、この二つの関係を同一性 (tādātmya) として理解している (see Jñ 275a2-3 (ad P Vin III 286a7): du ma la 'jug pa la tha dad pas de'i bdag nyid (*tādātmya) kyis khyab pa'i phyir **dbye bar mi nus pas** ...)。

ジュニャーナシュリーバドラとダルモータラにおける帰謬法と帰謬還元法の説明は、形式的には相似している（一覧表 9-11 を見よ）。しかしながら、両者の見解には僅かな相違が存在する。ダルモータラは、論証主題が存在しない帰謬還元法において、対論者説を否定する論証を示唆している。この場合、その論証によって立論者自身の見解を示すということも可能であった。一方、ジュニャーナシュリーバドラは、帰謬還元法も対論者説の矛盾しか示さないという点を強調している⁶⁵。

〔もし普遍が多く個物に存在するならば、それは多という本性を有するであろう（＝帰謬法）。〕その場合、〔この本性は、普遍の本性、即ち〕単一性と矛盾する〔ことになろう〕。だが、もし〔普遍の〕多様性（多性）（＝能摂特性）が認められないならば、つまり〔普遍が〕単一であると見なされるならば（*ekatvenēṣṭa-）、〔この単一性は、〕「〔普遍が〕多く〔個物〕に存在すること」（*anekavṛtti）（＝所摂特性）と矛盾することになろう（＝帰謬還元法）。何故なら、多様性（多性、正確には普遍の非単一性）は〔普遍の単一性によって〕排除されるからである。

Jñ 275a1-2 (ad P Vin III 286a7): de ltar na gcig nyid dang 'gal lo // gal te tha dad pa nyid **khas mi len na ste** (P; sta D) gcig nyid du 'dod na tha dad pa (par P D) ldog par 'gyur bas du ma la 'jug pa dang 'gal lo //⁶⁶

上述の文章の後半では、帰謬還元法が説明されている。その論理は次の如くである。能摂特性である「多様性」（普遍の多性）の否定、即ち普遍の単一性の肯定に基づいて、所摂特性である「（普遍の）多個物存在性」が否定される。その場合、ジュニャーナシュリーバドラは単に、論証因たる普遍の「単一性」が普遍の別の特性である「多個物存在性」と矛盾することを示すに過ぎない。

そ〔の、「多性」による「多個物存在性」の包摂の論証〕⁶⁷によって、否定的随伴関

⁶⁵ See Tani [1991: 359] .

⁶⁶ Tani [1991: 359] に英訳。

⁶⁷ See Jñ 276a5: **khyab par bya ba** du ma la'jug yin la de la yang **khyab par byed pa** tha dad pa nyid du gnas pa'i **ngos po 'di** sngon po dang ser po la sogs par **sgrub par byed** la /.

係（*vyatireka）における包摂関係、つまり多様性（多性）を否定する場合には多〔個物〕存在〔性〕もまた欠如する〔という論理的関係〕が示される。それでもって、確かに〔普通の〕多〔個物〕存在〔性〕と〔多様性の否定、即ち、普通の〕単一性〔（＝帰謬還元法の論証因）〕とが〔相互に〕矛盾することを示すのであるが、反対の事柄、即ち多〔個物〕存在〔性〕と単一〔性〕とが〔相互に〕矛盾しないことを証明するのではない。

Jñ 276a5-7 (ad PVin III 286b5-7): des ni ldog pa'i khyab pa tha dad pa med na du ma la 'jug pa'i yang ldog par ston pas du ma la (D; las P) 'jug pa dang gcig nyid 'gal bar ston par byed kyi / de las **bzlog pa** du ma la 'jug pa dang gcig mi 'gal ba **sgrub par byed pa ni ma yin te** /

ここでジュニャーナシュリーパドラは、普遍の存在を主張すれば、多個物存在性を認める場合にも単一性を認める場合にも不合理が生じるという点で、普遍を単一の実体とする対論者の想定がジレンマの状況にあることを強調する。このことは、ジュニャーナシュリーパドラ自身が、論証因「多個物存在性」を用いた帰謬法だけではなく、論証因「単一性」を用いた帰謬還元法の場合においても、自らの見解を打ち立ててはいないことを意味している。これは、場合によっては帰謬還元法の帰結を自身の見解として認めるダルモータラの立場とは異なっている（一覧表 10-11 を見よ）。

更に、主題所属性の取り扱いに関してダルモータラとジュニャーナシュリーパドラの見解には一つの相違がある。先の文において（Jñ 275a1-2）ジュニャーナシュリーパドラは、帰謬還元法の論証因である「多様性（多性）の否定」を、「単一性」という肯定的な特性に置き換えている。これは、ダルモータラの見解、つまり、当該の帰謬還元法を論式化する場合、存在しない論証主題、即ち普遍には如何なる肯定的な特性も存在しない故に、論証因は否定的な形式で表現されねばならないとする見解を、ジュニャーナシュリーパドラが念頭に置いていないことを示している。換言すれば、ジュニャーナシュリーパドラは、論証主題である普遍が存在しないことによって惹起される問題、つまり、そのような論証主題にどうして論証因が所属し得るのかという問題に注意を向けていないのである。また、帰謬法の主題所属性の取り扱いに関してもジュニャーナシュリーパドラは何ら言及しない。帰謬法における主題所属性を否定する為の彼の根拠は、普遍の「単一性」と論証因である「普通の多個物存在性」との間に矛盾を認める点にある（see Jñ 276a7 ad PVin III 286b6f.）。

《訳者注》

- ① 原著で PVin III の引用と見なされた箇所の一部は誤りであり、正しくは、その直前の文を含めた以下の文章のうち太字部分が PVin III の引用箇所である。See Dh 7b8: **yul la sogs pa'i khyad par dang 'brel pa rdzas gang la yod pa ste / yul la sogs pa nges pa dang**

'brel pa gcig las **gzhan pa'i rdzas de dang ldan pa** (P; pa ni D) **ma yin te** /. これによれば、問題となる原文の *deśādiviśeṣavat* の語は所有を表す関係代名詞を用いて説明された上で (**yul la sogs pa'i khyad par** (**deśādīnām viśeṣaḥ*) **dang 'brel pa rdzas gang la** (**yasya dravyasya*) **yod pa ste**)、*anya* と同格の個物 (*rdzas*, **dravya*) にかけてられており (**gzhan pa'i rdzas de** (**tena ... anyena dravyeṇa*))、別の原文を想定する必要はない。

- ② PVBh(Ms)の写本 B 236a1 では、-*samsarggāvyavacchina*-となっている。
- ③ 本注は原著の注 32 に相当する。
- ④ 本注は原著の注 30 に相当する。
- ⑤ 本注は原著の注 31 に相当する。
- ⑥ 岩田 [1994a: (9)-(10)] に和訳。Cf. PVin III(Skt) p. 4, 4-7: *deśakālāvasthāviśeṣaniya-taikadravyasamsarggāvyavacchinnavabhāvāntaravirahād anekavṛtter ekasya na deśādiviśeṣavatānyena yogaḥ, tathābhūtasvabhāvasya virodhād bhinnadeśādiyogena, ...*
- ⑦ 原著では「PV III 286a6」となっているが、これは「PVin III 286a6」の誤りである。
- ⑧ 岩田 [1994b: (47), 注(17)] に和訳。
- ⑨ 岩田 [1996b: (402)] に和訳。
- ⑩ 岩田 [1996b: (404)] に和訳。
- ⑪ 岩田 [1996b: (404)-(405)] に和訳。
- ⑫ 岩田 [1996a: (19), 注(23)] に和訳。
- ⑬ 岩田 [1996a: (20), 注(26)] に和訳。
- ⑭ ジュニャーナシュリーバドラ (Ye shes dpal bzang po, 智吉祥賢、11 世紀後半頃) は PVin の他に『入楞伽經』(*Lankāvatārasūtra*) や『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālaṅkāra*) といった唯識関連文献に対しても註釈を著し、また密教者としても知られている。カシュミールで活躍した後にチベットに移った。チベットに伝わる彼の生涯については、羽田野伯猷「ジュニャーナ・シュリー・バドラ著『聖入楞伽經註』おぼえがき」(『チベット・インド学集成』第4巻 インド篇 II、法蔵館、1988 年) pp. 100-111 にまとめられている。

* 訳者付記

本和訳は、藤本が用意した下訳を三代が検討・修正を行う形で作成した。なお、本和訳作成に際して行われた読書会に佐藤隆大氏（早稲田大学大学院修士課程）が参加したことを記しておく。

（本稿は科学研究費補助金（課題番号 16H01901）に基づく研究成果の一部である。）

岩田孝『法称とその注釈者達における帰謬法と帰謬還元法』和訳（二）（藤本庸裕（訳）・三代舞（訳））

（ふじもとようすけ 早稲田大学高等学院非常勤講師・早稲田大学大学院博士課程）

（みよまい 早稲田大学非常勤講師・大正大学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員（P
D）、博士（文学））

『久遠——研究論文集』第7輯所収「岩田孝『法称とその注釈者達における
帰謬法と帰謬還元法』和訳（一）」に関わる正誤表

- ・ p. ii, l. 5 （誤） *Komenntatoren* → （正） *Kommentatoren*
- ・ p. 5, ll. 15-16 （誤） 2 Bde → （正） 2 vols.
- ・ p. 25, l. 17 （誤） 常に P であるものは → （正） およそ P であるものは
- ・ p. 30, l. 31 （誤） 課題番号 16H01910 → （正） 課題番号 16H01901
- ・ p. 31, l. 2 （誤） *Komenntatoren* → （正） *Kommentatoren*
- ・ p. 31, l. 5 （誤） *Komenntatoren* → （正） *Kommentatoren*